

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA天神南601号
TEL 092(731)2372
FAX 092(731)2373

No.167

2026年4月1日

〈URL〉 <https://www.peshawar-pms.com/> 〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



[写真] 被災地でも授業は続く (2025年12月9日)

アフガニスタンの苦境と第2期「緑の大地計画」——中小河川からの取水と溜池方式	村上 優
中村先生念願の「ハンセン病センター」が活動開始——未経験の診療に挑む医療者にエールを	藤田千代子
ジャララバード滞在記	山下隼人
ナー吉安灌漑事業について	ワヒドゥラー アクバリ
◎中村哲医師アーカイブ 識字率の神話	中村 哲
◎カラー報告 冬のガンベリ農場的一幕	
ナー吉安事業 着々と進行中!!	
アフガン東部地震支援、防寒具の配布	
ドクター中村記念ハンセン病センター開所!	
中村先生と苦楽を共にした熟練工たち	

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のペシャワール(パキスタン)での医療活動を支援する目的で結成され、現在は中村医師が設立したPMS(平和医療団・日本)のアフガニスタンでの医療活動や灌漑水利事業等の総合的農村復興事業を支援しています。

ホームページはこちらから▶



「いったい、私たちはどこに向かおうとしているのか、どうすればよいのか、誰も確たる答を主張できないまま、流されてゆく。だが他方で、時流から距離を置き、より良い世界を真剣に模索する心ある人々も、あらゆる分野にいる。私たちが持たなくてよいものは何か、人として最後まで失ってはならぬものは何か、私たちのささやかな実践が、それに想いをいたす機縁となれば、苦労も報われると思っている」

——中村 哲（『医者、用水路を拓く』、2007年刊より）

アフガニスタンの苦境と第二期「緑の大地計画」

——中小河川からの取水と溜池方式

PMS（ピース・ジヤパン・メディカルサービス）総院長 村上 優

煙霧のアフガニスタン

二〇二二年十二月よりアフガニスタンに渡航できるようになり、二五年十二月に総勢五名で第十一次の訪問を行なった。私自身は四度目の訪問で、アフガンには十二月六日から二四日まで滞在した。直接現場を見て、PMSスタッフと直に交流する大切さを身に染みて感じている。

降り立ったカブールは標高一八〇〇mで冷気を感じるが、これまでの同時期に比べて温かい。十月以降は全く雨が降っていないとのことだ。記録的な少雨は、アフガニスタンに限らず、隣国のイランでも六月以降全く雨が降らず、深刻な水不足に喘いでいる。PMS事務所のあるジャララバードに着くと、北のケシュマンド山脈も南のスピンガル山脈も全く見えない。煙霧である。排気ガスや細かな砂の粒子が漂い、視界を遮っている。

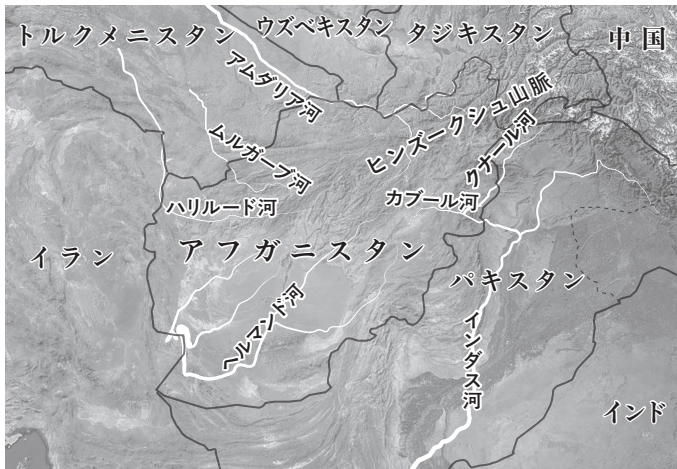
二〇〇〇年以降の大干ばつを眼前にした

中村医師から、温暖化・気候変動・干ばつ・飢餓について非常事態が常に報告されてきたが、改善の兆しは全くない。アフガンの平均気温は一九五〇年以降の六〇年間で一・八度上昇しており、二・〇度以上になるのも近い（河野仁氏の論文参照）。温暖化をもたらずCO₂排出量が非常に少ない国が、その影響を最も強く受けて干ばつが進むという不条理を世界は無視している。

国際河川という難題

アフガニスタンでは水不足の危機感が強まっており、政府の動きもあわたしくなっているように思われる。国によるダム建設などの報道に関しては隣国からの反発があり、水問題には細心の注意を払う必要があることを痛感する。アフガニスタンの大河は七千m級のヒンズークシュ山脈に端を発し、すべて周辺の隣国に流れる国際河川であるからだ。

たとえばヘルマンド河もその一つで、ヒン



アフガニスタンの主な国際河川

ズークシュ山脈から南西方向へ広大な流域を保ちつつ沙漠地帯を通り、最終的にはイランに流れるアフガニスタン最長の河である。温暖化が強まる前は三千mクラスの山々でも積雪があり、それが緩やかに溶けていた。年間降雨量は少ないながら緑を養うほどにはあり、地下に浸透した水はカレーズ（地下水路）を流れて田畑を潤していた。しかしヘルマンド河のアフガン最下流にある巨大湿地帯ゴズレは、二〇一六年から二〇二〇年にかけて完全に干上がった。カレー

ズ二六〇本がすべて涸れ、耕作が不可能になって一万二千家族が難民化せざるを得なくなり、PMSも何か救済の方法はないだろうかと相談された。このような危機を訴える声アフガニスタンのあちこちから聞こえてくる。

ヘルマンド河に関しては一九七三年にアフガニスタンとイラン政府の間で水利用の条約が締結され、下流域であるイランへの最低流量の確保が定められているが、これが守られることはなく、争いの元になっている。温暖化が進行して水問題が際立って対立的となった現在、平和裡に解決する見通しはないといっても過言ではない。

中村医師の苦闘

河川の上流下流の問題は国の間だけでなく、国内でも州単位、郡単位、村々の地域単位で生じるのは当然である。中村医師はマルワリード用水路建設に際して、右岸左岸など小さな地域単位で地元の高老会などに相談しながら工事を進めていった。この苦闘の一端は『医者、用水路を拓く』（二〇〇七年、石風社）に記録されているが、実際かなり神経をすり減らしていた。

「人と人の和解、人と自然の和解」という言葉は、そうした経験の上で育まれていったと思われる。人々が争わずに水を共有するには自制が必要であるが、水が豊富な時には自制できても、危機的な水不足の時には

どうするかが問われている。

第二期「アフガン・緑の大地計画」／ 流域貯水（溜池）

タリバン政権はアフガン全土で大規模ダム九基、小規模三六一基の灌漑事業を二〇二五年に手掛けたというが、詳細はわからない。二〇二三年に始めたアムダリア河（ヒズークシュ山脈から北西に流れる）での取水門十一門、二〇〇km以上のコシュテパ用水路建設も進んでいる。計画そのものは前政権時代に立案され、タリバン政権で建設工事が始まった。工法や環境調査、利害関係のある周辺住民との調整、国をまたいでの上流下流問題など、事前の準備がされたかどうかは不明である。

PMSは中村医師が『アフガン・緑の大地計画―伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』で示した精神を守り、大規模な取水を行なう灌漑工事とは同調しない。この本で中村医師はアフガニスタンの農業が回復するために、①大河川からの取水、②多数の貯水池を作る、という二つの方法を提示した。

大河川からの、斜め堰を用いて水を取水口に通く方法は中村・PMSがクナル河を中心に造った十の取水門で実効性は証明された。一方、涸れ川となった中小河川からの取水は貯水池（溜池）という方法を示したものの、今後の課題として残っていた。中村没後にPMS技術者がその構想を希望

として引き継ぎ、二〇二四年よりはナイージアンで、湧水などのわずかな水や、洪水による土石流などを集めては貯めていく治水・利水の方法を試みている。いわば第二期「緑の大地計画」である。二〇二六年九月にナイージアンでの工事が終了した後には、同じく冬の雪が残らなくなった四千m未満のスピンガル山脈の麓のマーマングラで工事を予定している。

こうした流域貯水の実効性が実証できれば、この方法で救済できる地域はアフガニスタンには数多くあり、すでに国内難民となっている人々には希望の灯りとなる。そして、この方法は下流への影響を与えないことも特筆すべきである。

ささやかな灯りでありたい

イランやパキスタンなどから強制帰還させられたアフガン人は二〇二三年以降五〇〇万人を超える。私が今回訪れたドラエヌール渓谷では、昨年八月の地震の被災地であるにもかかわらず、帰還難民の子どもたちが日々増えており、防寒着配布の調査時には正確な必要数を把握できなかったが、その後、追加して配布をした。住む所も食糧もなく、冬に向かう厳しい環境にあるこの被災地を頼らざるを得ない難民がいる現実

に直面した。
PMSは、ドラエヌール渓谷の村々に緊急食糧、仮設住居として的大型テント、厳冬

対策としての防寒具を三回に分けて配布した後、この二月にも更に毛布や防寒着を配布した。総額九〇万ドル(約一億四千万円)は一つのNGOとしては大きな負担であるが、実際は小さな支えでしかない。ただ、同

中村先生念願の「ハンセン病センター」が活動開始

—— 未経験の診療に挑む医療者にエールを

人々を元気づける中村先生の名前

皆さま、お変わりなくお過ごしでしょうか。この度もアフガン滞在を少々延ばし、二月十二日に帰国いたしました。滞在中は通常のPMS事業である医療、灌漑、農業に加え、昨年八月三十一日にクナール州を震源として発生した地震の被災地支援とハンセン病診療の再開などに従事しました。

灌漑事業では、二〇一八年の現地スタッフ来日時に寄付して頂いた「懐かしい」流速測定器を取り出し、PMSの全エンジニアが参加してクナール河の全水量を測定・計算しました。若いエンジニアたちには良い意味で刺激的な経験であり、私にとっても初めて見る調査で、大変興味深く勉強になりました。

胞の苦難に際して救援に心血を注ぐPMSスタッフの働きと共にペシャワール会があることは、私たちの心を温かくしてくれる。ささやかであっても支え続けたい。皆様からのご支援をお願い申し上げます。

PMS支援室長 藤田千代子

昨年十一月一日にオープンしたハンセン病診療所の正式名は「ドクター中村記念ハンセン病センター」です。職員たちが中村先生の名前を冠した診療所にしたいと希望しました。このセンターだけではなく、地震被災地への支援助物資を運ぶトラックにも中村先生の名前を含む支援プロジェクト名を明示したバナー(横断幕)を掲げています。アフガンでは中村先生を知らない人はいないと言われていますが、特にアフガン東部では伝聞ではなく実際に一緒に働いた人たちも多く、「ドクターサーブナカムラ」の名前を見聞きするだけで元気が出ると言われています。

医療施設での実地研修

中村先生の名前を冠したハンセン病セン

ターがいよいよ動き出しました。十一月、十二月はセンターの設備を整えて、ハンセン病についての学習に力を入れました。年が明けてからは、アフガン東部三州の州立郡立の病院の皮膚科外来に協力を仰いでPMS職員を同席させてもらい、ハンセン病の疑いのある患者の診察・治療につなげることを計画しました。各医療施設の皮膚科の医師には、中村先生が二〇〇五年に作成した、ハンセン病の早期発見・早期治療の助けとなる「カラーアトラス」(症例集)を手渡しています。外来診療で、アトラスに掲載されている皮膚疹や神経障害による変形等に類似する症状を持つ人はPMSのセンターへ送られ、専門的な検査を受けて診断につなげるのです。

一月はナンガラハル州、二月にはクナール州、三月からヌーリスタン州の医療施設での実地研修を計画しました。中村先生のペシャワール・ミッション病院における十年間のハンセン病診療によって確認されたアフガニスタン国内のハンセン病多発地帯です。ナンガラハル州の保健局長は、州内の病院や診療所でPMSが前述のような医療行為を実施することの許可書を快く発行しました。

未経験の診療への不安を拭うために

昨年の二ヵ月間で、センターの医療従事者九名(医師二名、看護師四名、検査技師二名、

薬剤師一名)は座学で基礎を充分学んだと実感しておりました。しかしながら、いよいよ実地研修へ出かける直前に確認したところ、やや心配になりましたので、一月初めに数日かけて、ハンセン病で侵される末梢神経の診かたや感覚・運動障害の症状などについて研修を行いました。

アフガニスタンでハンセン病診療の経験を持つ医療関係者は、PMSのドラエヌール診療所で働く四名の他にはカブールにほんの数名いるだけです。PMSが新規採用した職員たちは「見たこともない、行なったこともない診療」をこれから始めるわけです。彼らの不安はもつともだと思いながら、私が持っている技術と知識をすべて彼らに渡していこうと気持ち新たにしました。ありがたいことに看護師のうち二名は女性です。

ハンセン病? 別の病気?

私たちPMSが主に活動するナンガラハル州は二二郡から成ります。まずPMSの事務所があるジャララバード市内から実地研修を開始してみました。

ジャララバード市はナンガラハル州の州都です。二〇〇〇年にPMSが飲料用の井戸掘削を始めた頃とは様相ががらりと変わって大都市になり、州・郡立病院のほかに個人経営の病院や診療所が多数あります。その中で外来患者の多い、いくつかの病院や診療所で研修をしました。

二月上旬にはトルハム国境方面の病院訪問が予定されていましたが、ところが、一月末あたりから外部の医師が「ハンセン病ではないか?」と患者を我々のセンターへ紹介するようになりましたので、各地への医療施設訪問の人数を減らして、センターで患者の診察を行なうことにしました。

ハンセン病疑いの初めてのケースは首都カブールの整形外科医から送られてきた女性患者でした。右足関節の変形、長年にわたる足底の創、脚の付け根から足全体の強度な腫れがあり、職員たちは議論を尽くしました。医師の一人はハンセン病であると主張しました。ジア医師やハフィズラー医師も加わり、家族への問診も行なって総合



藤田PMS支援室長(右奥)より研修を受けるハンセン病センターの職員たち(2026年1月6日)

的に診断した結果、遺伝性ニューロパチーと診断されました。

職員にとっては良い一例となりました。単独で診断せず、先輩をも含めて皆で慎重に診断することの大切さを互いに確認できました。

トレーニングで揃った九人のハンセン病

ジャララバード滞在記

PMS支援室

山下隼人

再会を喜びあう

十二月のジャララバードは日差しのせい、冬にもかかわらず暖かい空気が立ち込めている。見慣れた町の風景は、訪れるたびに景色が変わる。大がかりな道路の敷設や拡張、新たに始まった公共事業で清掃をする人々、真新しいモスクの建設、帰還難民のキャンプ。カブール空港から三時間かけ、ようやくPMS事務所に着した私たちを、いつも通りPMS職員たちが迎え入れてくれた。

「アッサラームアライクム。ヤマジャン、よく来たね。元気ですか？調子はどう？病気はない？寒くない？家族は元気？結婚

診療職員が、一年後も私たちと一緒に働いていることを祈りたいと思います。

中村先生が長年願っていた「ハンセン病センター」が、皆さまのご支援によって開設されましたが、まだ始まったばかりです。どうぞ今後とも末永い応援を切に願います。

したか？」長い挨拶もいつも通り。

「ワレイコムサラーム。元気です。お変わりないですか？結婚はしてないです」。挨拶は長ければ長いほど良い。「あなたをよく知っていますよ」ということが伝わるからで、家族や子どもが元気が尋ねると喜ばれる。

お別れのときもハグと握手をして長々と挨拶を述べる。「また会いましょう、命があれば。インシャッラー」。次はお互い生きて会えるかわからないので、無事を祈る。日本の挨拶も元は同じような意味合いがあったと聞いたことがあるので、厳しい環境で生活をしている人々ならではの感覚なのだろうと思った。

会計担当者との密な時間

私たちは滞在中、治安上の理由で事務所の敷地外へ自由に出かけることができない。現場へ行くのも一日おきになり、事務所で作業をする日が増えた。そのため、PMS会計部門の担当者（ハニフラさん、カーピルさん）とじっくり話をする時間ができた。



会計担当者たちと意見交換をする山下隼人（2026年2月1日）

私の所属するPMS支援室は、現地事業の会計業務が主な役割の一つで、現地会計部門とは日頃から頻りに連絡を取り合っている。特に十二月はPMS会計の年度締め作業があり、一月から三月は外部機関からの会計監査のほか、経済省や財務省へ提出する会計報告書の作成があるため、事務所で過ごす時間があったのは良い機会だった。

ハニフラさんからは、財務報告書の作成方法をアップデートする必要があると提案された。大まかな制度は前政権からの引き継ぎだが、以前はナンガラハル州政府の経済局、財務局がそれぞれ確認し承認していたものが、現在は中央政府が会計監査報告

* 冬のガンベリ農場的一幕 *



サツマイモの伏せ込み。アフガン東部で何月からツルの植え付けが開始できるかを調べる目的で、種芋を寒さから護るために設置されたビニールハウス内で行なわれた。(2026年1月7日)



柳の木で骨組みを組んだ自家製ビニールハウス。早朝4時の外気温は約1度、ハウス内は約17度。正午の外気温は約15度、ハウス内は約37度。(2026年1月7日)



芋を護るのは寒さからだけではない。野ネズミなどの獣害対策として2022年に3匹の猫が放たれた。ネズミをくわえている姿が目撃され、仕事をこなしているようだ。繁殖し、現在は16匹ほど。(2026年2月4日)



今年も約40ヘクタールで小麦栽培が行なわれている。一角では、畝ごとに種の蒔き方や栽培の方法を変え、収穫量などの結果が比較できるようにしている。若手のバシール技師が担当。(2026年1月10日)



黒砂糖工房。ナンガラハル州はサトウキビの名産地で、現地では客人をもてなすお茶受けに必須。意外にも、ナンとの相性も抜群。(2026年1月11日)

◎ナージアン事業 着々と進行中!!◎



2月初旬、ナージアン作業地から見たスピングアル山脈。アフガン人は、しばしば山の積雪を観察する。中村医師は2000年初頭からアフガニスタンの干ばつを訴えてきたが、山の白雪は年々薄くなり、干ばつは悪化する一方だ。(2026年2月8日)



上写真に対してマルワリードⅡ(カチャラ)用水路建設中、作業地から見た2017年のスピングアル山脈。戴く白雪は今より広く厚い。5000m級の山々が連なるスピングアル山脈は、冬の間万年雪を貯え、かつては豊かな水源としてアフガニスタンに恵みをもたらしていた。(2017年1月26日)



モラヘイル用水路末端。用水路改修後、これまで長く水が届いていなかった地域にまで送水ができるようになった。回復した農地を耕し、小麦栽培を再開した畑も多く見られる。(2025年12月13日)



ナー吉安事業では、トールノウ谷、ホラガイ谷、ギーダルノウ谷という複数の谷で砂防堤の建設に取り組み、降雨後に流れ下る鉄砲水の緩流化と貯水を図っている。砂防堤は若手のポーパール技師が担当。(2025年12月13日)



モラヘイル、カチコール、ミアガン用水路の整備が完了し、現場は最上流のバゴン用水路に移っている。ナー吉安事業は今年9月の完工に向け、バゴン地区での用水路と湧水路の整備を残すのみとなった。用水路は若手のワヒドゥラー技師が担当。(2026年2月17日)

●アフガン東部地震支援、防寒具の配布●



PMSは2025年9月～10月にかけて行なった食糧やテントなどの支援物資の配給に続いて、厳冬期を迎えた12月にグラエヌール地区で12,000人の子どもたちへジャンパーを配布した。日本人メンバーもアムラ村の女学校とカライシャヒ村のマドラサでの配布に同行した。(2025年12月11日)



2026年2月には、クナール州ワディールダラの最上流に位置するアレク村とシエマッシュ村の仮設キャンプに居住している約1,200家族のために、国産(良質のアフガン製)の厚手の毛布1,200枚と子ども用ジャンパー9,000着が配布された。昨年10月に配給を行なったヌールガルキャンプなどに避難していた村人たちは、寸断されていた道路が整備されたことで帰還し始めていた。(2026年2月10日)



昨年8月末の地震から約半年が経とうとしている現在も、損壊した家屋は手付かずとなっており、人々は村の近くの仮設キャンプで生活を続けている。復興にはまだまだ時間を要する。(2026年2月7日)

被災地の調査から支援物資の買い付け、夜遅くまでの打合せ、そして配給と、地震発生の直後から始まった迅速かつ確かな支援はPMS職員一人一人の力によって実現した。それらの多大なる労をねぎらい、ジャララバード事務所2階の廊下を即席の食堂に変え、魚のフライとマトンカライ（カライは鍋という意味。羊肉をスパイスなどと煮込んだ料理）、山盛りのフルーツが振舞われた。（2025年12月18日）



食後には、職員一人一人に日本から持ってきたショルダーバッグと目薬（スーッとするものが人気）が慰労品として村上PMS総院長より手渡された。



マトンカライ



魚のフライ

●ドクター中村記念ハンセン病センター開所!●

12月22日、ドクター中村記念ハンセン病センターの開所式が執り行われた。「ハンセン病事業に協力を惜しまない」と表明していた保健局長をはじめ、行政関係者らも招待され、村上総院長が挨拶した。式典後には、ジア副院長が横断幕前に職員一同を呼び集めて「中村先生の教えに沿ってハンセン病患者の早期発見のために、積極的にフィールドワークに行こう」と激励の言葉を投げかけた。(2025年12月22日)



ハンセン病患者の早期発見のために職員の研修を行う藤田PMS支援室長。らい菌によって侵される神経と筋力の検査方法を身につけ、1月からのジャララバード市内の病院での実地研修に挑む。(2026年1月6日)



手足や指が正常に動くかを確認する検査と神経の触診の練習を職員同士で繰り返した。

* 中村先生と苦楽を共にした熟練工たち *

2025年12月31日、PMSで20年以上勤めあげた熟練の現場監督である、ヤール・モハマッドさんとザミール・グルさんが退職の日を迎えた。

ヤール・モハマッドさんは空爆と干ばつでペシャワールへの難民化を余儀なくされたブディアライ村出身。PMSによる水利事業が始まったことで帰還して以来、「ブディアライ組」を率いてあらゆる作業をこなし、蛇籠班の班長としても後継の育成に力を注いだ。

ザミール・グルさんは中村医師曰く「作業場では配筋図が読める数少ない現場監督」であり、水門や橋、サイフォンなど数々のコンクリート構造物建設を指揮した。

藤田PMS支援室長が「中村先生はとても頼りにしていた二人の事をよく話していた」と語り、ジャ医師をはじめ各事業責任者から労いと感謝の言葉が贈られた。



ヤール・モハマッドさん

ザミール・グルさん



「コンクリート構造物の鬼ザミール・グル、蛇籠の鬼ヤール・モハマッド、二人が縁の下の力持ちだ。二人とも長老格となったが、後継は確実に増え続けている」(2017年3月7日／中村医師メール報告より)

中村哲医師の著作等

(価格は税込)

アフガン・緑の大地計画

Peace (Japan) Medical Services & ベシヤワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円

好評発売中!

わたしは「セロ弾きのゴーシュ」

中村哲が本当に伝えたかったこと 1760円

天、共に在り

アフガニスタン三十年の闘い 1760円

NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
☎03(3464)7311

希望の一滴

中村哲、アフガン最期の言葉

A5判192頁オールカラー 1650円

西日本新聞社 福岡市中央区天神1-4-1
☎092(711)5523

アフガニスタンで考える

～国際貢献と憲法九条～ 726円

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る

アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 1188円
岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
☎03(5210)4000

医者、用水路を拓く 1980円

ベシヤワールにて 1980円

ダラエ・ヌールへの道 2200円

医は国境を越えて 2200円

医者 井戸を掘る 1980円

辺境で診る 辺境から見る 1980円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
☎092(714)4838

ほんとうのアフガニスタン

1650円 光文社
文京区音羽1-16-6 ☎03(5395)8116

医者よ、信念はいらないまず命を救え!

1980円 羊土社

千代田区神田小川町2-5-1 ☎03(5282)1211

アフガニスタンの診療所から

858円 ちくま文庫

台東区蔵前2-5-3 ☎03(5687)2680

映像記録DVD

荒野に希望の灯をともし

～医師・中村哲の35年の軌跡～

[2021年発売] 2970円

アフガニスタン [16年発売] 2970円

用水路が運ぶ恵みと平和

アフガニスタン [12年発売] 2750円

干ばつの大地に用水路を拓く

[企画]ベシヤワール会[製作]日本電波ニュース社

書、経済レポート・財務レポートを承認するようにになった。現政府は企業やNGOが不正(脱税や収賄)をしていないか目を皿にしてチェックし、少しでも不備があればペナルティ(罰金)を取っている。政府の方針は日々変化していて、PMSもそれに沿うような形式を作り変えたほうがよいこととだった。

「ミスターヤマシタ、監査は年々厳しくなっている。過去、アフガニスタンでは企業やNGOが役人と癒着し、収賄や不正が行っていた。PMSは実績が広く周知されていて、特にナンガラハル州では大きな信用も得ている。とはいえ今の中央政府は斟酌(しんしやく)しないでしょう。彼らが賄賂を受け取るなら別だが」。ハニフラさんは冗談を言って笑った。

政府の目が厳しくなっているのは、地震の被災地支援一つを取ってもそうだった。政府は国外からの支援の金額や内容を統計デ

ータとしてまとめるために、全てのNGOに報告書の提出を課していた。また、クナール州の支援担当局では、被災地で配布する毛布の厚さやサイズ、生産地、見積額など細かい報告に時間を取られ、ジア先生らが辟易(へきえき)していたこともあった。

そのような状況なので、財務報告書の見直しについては日本のPMS支援室と現地会計部門がそれぞれ作成し、次回の滞在時に改めて意見交換を行なうことになった。

もうすぐ麦畑がよみがえる!

今年九月に完工予定のナージアン事業地には、着工前の調査当時からよく訪れていた。工事は順調で、現地を訪れるたびに巨大な構造物が増え、進捗がわかる。モラヘイル用水路からの送水はすでに始まっていて、下流域では水が届いた荒地で耕作が始まっている。「ここに、麦畑がよみがえるのか」——そう思うと、中村先生とPMSの

仕事の大きさに改めて感銘を受けた。

ナージアンでは、三人の若手エンジニア(ポーバル、ファイズラー、ワヒドゥラー技師)が働いている。彼らは私と同年代。技術的な質問をするとなぜかニヤッと笑うが、丁寧に答えてくれる。砂防堤、用水路、構造物の各現場を三人がそれぞれ担当している。

中村先生が携わった取水設備などの構造物を見ると、無駄に感じるものがない。どしりと佇(たず)み、機性能性が追求された質素な頑丈さが印象的だ。

現在PMSではディザール技師が構造物の設計を担当しているが、中村先生の素朴なデザインとは少し異なる出来栄だ。階段が造られていたり、法面(のりめん)に芝生が敷き詰められていたりして、見た目へのこだわりが感じられる。しかし、日ごろ会計業務をしている私は「この装飾のようなものは無用な出費では?」と穿(うが)った目で見てしまいがちで、「これ、必要なんですか?」とつい尋ねて

しまった。ディダールさんはため息をつき、「ヤマシタさん、これは技術的な理由があつて……」と真面目な表情で長々と説明を始めたが、周囲のスタッフが立ち去った後、「訪れた人が安らげるように、景観を良くしたいのも理由の一つです」とこっそり教えてくれた。

被災地支援の舞台裏

昨年八月末に発生したアフガン東部地震（マグニチュード6）の被災地支援について、PMS事務所の様子をお伝えいたします。

PMS職員たちは、地震の翌日から支援に向けた準備に奔走していました。物資配給前に現地調査をして、配給対象者の選定をするメンバーは特に疲弊していました。ジア先生をはじめ、事務責任者のサーブルジャン、会計のハニフラさん、灌漑のファヒーム技師、農業のアジュマル技師、ファイズラー医師といったスタッフが中心でした。

被災地調査は総勢二〇名ほど、いくつかのチームに分かれて行なわれました。彼らは連日、日の出前に被災地へ向け出発し、日没後二〇時過ぎに疲労困憊でジャララバードに戻り、その後、藤田室長と深夜近くまで食事を摂る間もなく密な打合せをしていました。

また、「事前に収集した被災地の情報」と「現場まで実際に足を運び知り得た情報」は著しく異なっていることがしばしばあり、そ

の都度計画が変更されました。調査のため四駆と徒歩で半日かかる山道を登ったにもかかわらず、徒労に終わることもありましたが、配給の実動隊となったその他のスタッフたちは、物資の調達、実際の配給を行ないました。彼らも夜遅くまで翌日の物資を取り寄せ、ジャララバード市内に在庫がない物はカブールまで探しに行き、手配しています。

最初の配給（ダラエヌール郡）には日本人メンバーも同行しましたが、PMS事務所に戻った後は深夜近くまでジア先生らが藤田室長と今後の打合せ、その他のメンバーは疲労困憊のなか翌日の物資の買い付けに走りまわりました。

翌日は早朝（六時半）に事務所を出発（物資を積んだトラックは五時過ぎに出発）し、私たちもクナール州ディワガルでの食糧配給に同行し、十七時にジャララバードへ帰ってきました。

PMSは強い意志で被災地支援を開始しましたが、「同胞のため一致団結したアフガン人たちによる美しい奉仕活動」などと形容できるものではありませんでした。徒歩での山岳被災地調査、何百組という物資の積み下ろし（一組一〇〇kg以上）等、連日の過酷な肉体労働に疲弊したスタッフたちは苛立ち、一触即発の状況でした。声を荒げ、一時職務を放棄するスタッフさえいました。また、ジャララバードでは夏場は暑さを凌ぐため、町中が電気を使い、頻繁に停電

します。ただでさえ脆弱なインターネット回線がその度に切断され、復旧が深夜になることもしばしばです。日本との連絡の際にテキストのみのメッセージでさえ送受信に難があることも珍しくありません。政府が全国でインターネット回線を遮断したことも重なり、一時は被災地支援の大きな障壁となりました。

その後もPMSによる被災地支援は続き、今年一月にはダラエヌールの子どもたちへジャンパーの配布、二月にはクナール州ワディールダラで毛布とジャンパーの配布が行なわれました。いずれもPMSが買い付けた質の良い国産（アフガン製）で、ジャンパーが届けられた子どもたちは大はしゃぎで駆け回り、大人たちは日本への感謝を述べていました。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四つ折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

*引き出しのなどに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手はお受けしておりません。

◎現地スタッフからの便り

ナージアン灌漑事業について

PMSエンジニア
ワヒドゥラーアクバリ

若手エンジニア三人組

私は、PMSエンジニアのワヒドゥラーと申します。

現在PMSの灌漑セクションでは、二〇二四年四月に着工された「ナージアン灌漑事業」が進められています。

PMSの私たちが若い三人のエンジニアは、このプロジェクトで大まかに以下の三カ所、取水口（堰、取水門）・用水路・貯水池に一

人ずつ配置されてPMSの職員や地域住民と一緒に工事を進めています。

私はこの流域にある、モラヘイル、カチコール、ミアガン、バゴンの四つの既存水路の改修工事の担当になりました。この用水路の改修工事により、最下流に位置するモラヘイル用水路に上流の三つの用水路の余水が全て注ぎこまれ、水不足に陥っている農地が耕作可能になる計画です。

まずモラヘイル既存用水路の改修工事に取りかかり、貯水池につなげました。その後、モラヘイル取水口のすぐ上流に位置するカチコール用水路に二〇二五年二月二二日に着工しました。全長三一〇〇メートルの素掘りの既存用水路の幅を整え、PMS方式のソイルセメントのライニングを施し、

◎重版出来！

中村哲対談集

人・水・命 ペシワール会編／石風社刊

【対談者】徳永進／井上ひさし／池澤夏樹／鶴見俊輔／養老孟司／原奈／辰野勇／菅原文太／大澤真幸／半藤一利

今こそ中村医師の言葉を！

*詳しくは同封のチラシをご覧ください。
2025年12月刊／四六判並製 1870円(税込)

◎地方出版文化功労賞受賞

中村哲 [上下巻]

思索と行動

中村哲著 ペシワール会発行

【ペシワール会報】現地活動報告集 1983～2019

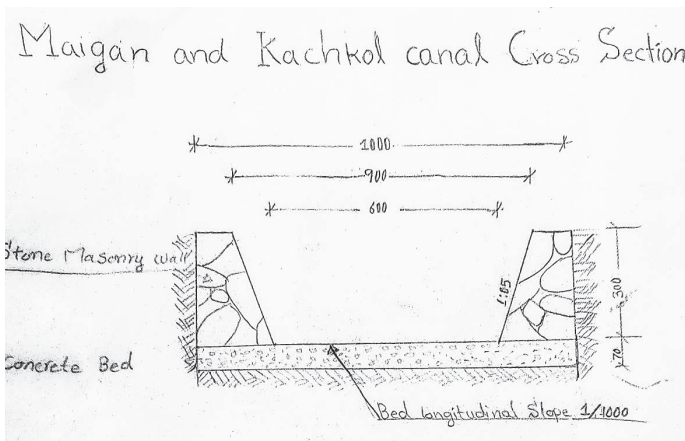
会報に掲載された中村医師の報告をまとめました。ぜひご購読下さい。

A5判上製 上巻432頁／下巻456頁 各2970円(税込)



水路側面の大部分は練り石積みを施工（図参照）。この用水路の水源は川からの取水に加え、カチコール湧水と対岸のシカンダル湧水です。対岸の湧水はナージアン川底を深く掘り下げてパイプで横断させ用水路に流し込みます。このパイプに沿わせてフィルターパイプを設置して川の浸み水も導水する工事をしました。カチコールの用水路からの排水はモラヘイル用水路へ取り込まれます。

次のミアガン用水路工事は二〇二五年八



ワヒドゥラー技師が描いた用水路改修工事の図面

月二六日に着工し、同様の改修工事を二六年二月に終了しました。ミアガン用水路も全長三一〇メートルであり、余水はカチコール用水路に合流します。

以上のように各用水路の余剰水は農地灌漑後には最終的に最下流のモラヘイル用水路へ流入します。これらの水路はPMS工法に基づいてライニングが施され、用水路両壁は練り石積みで築かれており、水の損失防止のため効果的に機能しています。本事業はまだ全ての工事を終えていませんが、今では既に復旧している農地を見ることができま

本事業の主な成果

カチコールとミアガンの両水路は村落の農地だけでなく居住地をも通過しており、ソイルセメントのライニング施工により以下のような効果が確認されています。

- ・水損失量の減少
- ・家屋への水分浸透が解消した
- ・水路損壊による居住地への洪水流入が無くなった
- ・農民の灌漑作業が容易になった

本事業以前は各水路が繋がっておらず、適切な配水システムがなかった。そのため、余剰水は川や道路、他の畑へ流出したりして、下流側の農地に水が届いていなかった。現在、この問題は完全に解決されている。

用水路建設中、地域住民は事業に積極的に協力しました。本プロジェクトの成果に期待を寄せる地域住民は、改修のため用水路が家屋の一部に影響を及ぼす時でさえ、協力を惜しまなかったのです。

地震時の緊急支援

ミアガン用水路のライニング工事中であった昨年八月末、強い地震がアフガニスタン東部、特にナンガラハル州ドラエヌル方面、クナール州のヌールガル、ディワガル郡を襲い、数千人の死傷者が出て多くの家屋が損壊。PMSは通常の事業のみならず、被災者への緊急支援を実施し、私も調査チームの一員として参加しました。チームが被災地を視察したところ、住民に食糧が届いていないことが判明しました。そこ

で緊急支援を三段階に分けて実施しました。第一段階―被災村落への食糧・毛布配布 第二段階―寒さが深まる中、テント配布 第三段階―厚地の毛布・防寒着（子供用）配布

配布

被災地視察中、崩壊した家屋の脇に立っている老人がいました。彼は家族全員が前夜、食料も避難場所もないまま寒空の下で過ごしたと話しました。私たちが食べ物と毛布を渡すと、その老人は「地震後初めての支援だ」と喜んでくれました。そして、このPMSの支援は単に寒い夜のための支援であっただけでなく、地震に被災して絶望している自分たちに「希望」を取り戻させてくれたと言いました。

日本の皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

◎中村哲医師アーカイブ

識字率の神話

*「辺境で診る 辺境から見る」(二〇〇三年刊、石風社)より

中村哲

文化とは何だろうか。と考えたのは、ヒンズークッシュの山中を羊飼いに連れ添って単身歩いていた時だ。ある村で日が暮れ、一夜の宿を請うた。どこの村にもゲストルームがあって、旅人を快く泊める。だが日

本人など初めてで、私を見ようと、まるで緑日の夜店のように人が集まってきた。その時私は高価なニコンのカメラを持っていたので、ふと不安になった。この住民たちが自分を殺して持ち物を売りさばいて山分

表紙写真によせて

被災地でも授業は続く

ドラエヌールの村。PMS・ペシャワール会から届けられた防寒着をまとい、少年たちは青空の下で授業を受けている。室内よりも屋外のほうが暖かくなることもあり、冬季でもこうした光景が見られる。子どもたちは必死に学ぼうとノートをとり、先生の言葉を、息を弾ませながら大きな声で復唱する。日本に比べればはるかに教育環境は厳しいが、それでも子どもたちの瞳は燦然と輝いていた。

「みんな暗い顔して生活しているかというと案外そうでもない。やってくる日本人ワーカーの方がよっぽど暗い顔をしている。持てば持つほど、人間の顔は暗くなっていく」

現地で人々と触れ合い、その暮らしを見つめていると、中村先生の言葉が頭のなかで何度もよみがえり、静かに胸の奥へと沈んでいく。

今日も青空の下。子どもたちは顔を上げ、ただ未来を見つめていた。

けしても、誰も分からない。わずかの間だったが不安に駆られて、見守っていたころ、お茶が配られ、誰かが石油缶の底を叩いて調子をとり、踊りが始まった。そのうち一団が輪を作って座り、即興詩を吟じ合っていて、歌会が催された。客人の歓待と自分たちの娯楽を兼ねるといふわけだ。私は村人の好意に対して恥じ入った。

貧しい自給自足の山中の村で、村長がラジオを一台持っているだけ。いったい娯楽というものがあのかと怪しんでいたが、人は楽しみをどこでも工夫する。玩具がなくとも、子供が遊びを見つけると同じだ。アフガニスタン、パキスタンには無数の詩人がいて、一部の作品は口から口へ伝承される。少し気の利いたものなら、即興詩を

すらすらと作る。さしずめ日本の俳句や和歌に相当する。ペルシャ語もあるが、地元の母語はパシトゥ語で、まだ書き言葉が完全には確立していない。私たちの病院に勤務する医師でもパシトゥ人なら、掛け合いの詩で楽しみ合う。

驚くことに、字の書けない有名な詩人もいて、相応しい尊敬を集めている。読み書きができないのを恥じることなく、軽蔑することもない。字が読めると自称する者でさえ、ペルシャ語の証文などが扱えるだけである。先進国には識字率を文化的基準に考える向きがあるが、これは見識を欠く初步的な誤りである。なまじ「教育」を授けて悪知恵を育てない方がよい。

PMSの動き

- 2025年12月6日～'26年2月11日 PMS支援室員がジャララバード事務所に滞在
- 12月11日 ドラエヌール地区の学校、マドラサで被災した子どもたちにジャンパー配布
- 12月22日 ドクター中村記念ハンセン病センター開所式
- 2026年1月1日～ ハンセン病センター職員がジャララバード市内の病院の皮膚科外来で研修
- 1月25日～2月2日 マルワリードI用水路内の7カ所のサイフォンで浚渫作業
- 2月10日 クナール州ワディールドラ上流の被災地で毛布・ジャンパー配布

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承くださいよう、お願い致します。

*会費、寄付をご入金される際は、払込用紙の受領ハガキ欄の「要・不要」のどちらかに〇印をお願いします。

●事務局だより

*桜の季節になりましたが、この冬も豪雪による被害が多発しました。被災された皆様には遅ればせながら心からのお見舞いを申し上げます。一方、東日本の太平洋側や西日本などでは「三〇年に一度の少雨」で、深刻な水不足が懸念されています。山田堰がある筑後川水系の主要ダムの貯水率も厳しい状況で、取水制限、減圧給水が実施されています。このような折から、中村医師の「水」に関連する発言を紹介いたします。

「ある会場で中学生が立ちまして、水の問題を自分は考えているけれども、自分が出るのは水道の水を節約して使うことぐらいですが、それでいいんでしょうか、という質問があったんですね。私はそれは立派なことだと思いますね。その人にしか出来ないで、他の誰にも出来ないということはあるわけですから、たかがあなたが水道の水を少し節約したくらいで水問題は解決するもんですか、と大人達は言いますけれども、その大人達でさえ、そういう事をしていないわけなんです。そういう小さな積み重ねがやがて大きな実を結び、水問題というもつと大きな問題につながっていくんじゃないかと思えます」

(二〇〇八年、愛真高校での講演会より)

*昨年度は八月末の大地震に対する見舞金も含め、多くのご支援をいただきました。被災地への食糧配給やテント・防寒着の配布など、すべて皆様のご寄付によるものです。ありがとうございます。

新年度となり、会費等を納入される方々が多い時期を迎えました。受領ハガキの発送やお問い合わせへの対応など、事務局ボランティアが懸命に作業しておりますが、少々お待ちいただく場合があるかと存じます。どうぞご容赦くださいますよう、お願い申し上げます。

●PMS支援室より

*昨年十二月に地震被災地のグラエヌールの子供たちへの防寒着を配給した。一月には、ワディールダラの二集落への道路が整備され住民が戻り始めているとの情報が入った。PMS職員二名が様子を見に

行ったところ、四駆の車であればかなり近くまで行けることが分かり、PMSの職員三〇名が一斉に調査を実施し、二月一日、一二〇〇家族に厚地の毛布と子供用防寒着が配給された。物資の受け取りには子供も多くみられた。地震で両親または父母のどちらかを亡くした子供も多く、彼らが兄弟姉妹の数だけのジャンパーを両親いっばいに抱えて嬉しそうに帰って行く姿に慰められた。

配給を終え、谷を下っていると荷物を背に徒歩で下っている男性がいたので様子を尋ねたところ、「一週間に六回余震があった、自宅の修理をしたが余震で再度崩壊した」とのことだった。国道からワディールダラに入り、上流へ向かうと、谷の畑にはまるで大きな花が咲いたようにテントが張られたところが多く、家屋の復旧にはまだまだ時間がかかりそうであった。被災地支援には中村先生亡き後にPMSに入ってきた職員も加わり調査、先輩職員と一緒に物資購入、配給に携わった。こうして中村先生の「自分の部署の作業だけでなく必要なら何でもする」という考えが浸透していくのだろう。

㊦村から

*大祖父の著書で、火野葦平さんのことを知っていただけなので、玉井家の血を全て受け継いだ哲先生の活動に共感しました。

ボランティアになって暫くして、先生の御人柄に触れる出来事がありました。仕事の途中、暖かい視線を感じて目を上げると、先生の輝くような優しい笑顔が目の前にあり、少々照れましたが、先生が更に素晴らしい事を成し遂げるのだと思いました。クリスチャンの大先輩としても尊敬しています。先生は本当に真実の愛の業を行なわれたのだと思います。昨年、スタッフ同士でパシトゥ語を勉強していた、途中から、哲先生がワーカーさんの為に作ったテキストも使っています。それを見て、先生の、現地に懸ける強い想いが改めて胸に迫ってきました。残された方々だけで事業が発展して行なわれていることからも、哲先生の偉大さが良く分かります。これからも会の更なる発展を祈ります。(C・Y)

会 則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州(現カイバルパクトウンクワ州)なびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局を

〒八一〇—〇〇〇三 福岡市中央区春吉一—一六八 VEGA天神南六〇一
TEL〇九二—七三三—一三三七二
内におく。

総会、現地報告会は原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。